

『其れや無論然うだらう。然し君のグリータアパートが無意識に此方へ向けられて居たのは事實だらう。』

と牛込の男は頭を撫せながら言ふ。

『然し僕は白状する。僕は子供が生れる少し前迄の心地と今の心地とは大部違うやうな気がするね。……たしかに。』

『何う?』と税務署へ行つて居る男は顔を少し出して大井田の方を見る。

大井田は物を言ひたさうにして口鬚を上下に動かして居た。

『言つたつて君達には判らんよ。第一君等は戀の経験があつても子を産んだ事がないからねー』

『無い事もないよ。』と一番端の男が言ふと、

『然うだらう! 君なんか二三人はあつたらうよ。』

と冷嘲した男もある。女連も物に襲はれたやうに笑ふ。然し別に此方の話を聞いて居るらしくもなかつた。

看護婦は八疊の方へ来て女連に何か言つて行くと、二三人笑ひながら其後へ付いて行つたのがある。廊下では足音がぱた／＼して産室でも陽氣な笑ひ聲がする。

『まあ太つてること! 居らつしやいな。』

といふ甲高い女の聲がすると居残つた連中も其方へぱた／＼と駆け出して行く。

赤い袴や青い袴はランプの光にちら／＼して見える。

主人は一寸座を外して産室の方へ行つて見ると、今は看護婦が赤子を湯に入れて居る所だ。

若い女連の顔はたらのみの周囲に并んで、其彼方には自分の妻君は佛様のやうな顔をして少し微笑つて見て居る。

可憐といふよりは怖しいやうな気がする。其處には幾らか妻君に對する羞耻の感も交つて居た。思はず急いで其處を出て本の室へ歸つて來た。

『何か初まつたのか。』

『なかに、子供を湯へ入れて見せてるんだ。まるで子供を玩弄物かなんどのやうに思

つて居るんだからね。』

『其れでなければまた赤坊なんか養育そだてられやしないよ。遊戯分子といふ奴あいくらかなくちや。』と牛込の男は仔細らしく判断を下す。

『然うだと。』大井田は領いて『其れが女の命だ。結婚なんかも男の方から餘り緊縮して要求するから失望するんだ。』

『だから君なんかも、もすこし此遊戯分子といふ奴を加味しちや何うだね。』

『所が意識した遊戯分子はやつぱり駄目だ……女は無意識の内に然う行つてるんだかしら、が……』

『けれども幾らか意識してやるといふ事も必要さね……僕等には他人のやうにはなれないんだから……』

間もなく赤子の泣く聲がする。子供には解りもしないのに色々な複雑な言葉で、皆してあやして居るのが聞える。

『まあ！ 何を見て居るんでせう……』

『三浦さんの胸の所をじつと見て居るわ。』

『あれ今度はあたしの方よ。』

『おや、何か悲しい事があると見えて、誰れかさつといぢめて居る夢でも見て居るんでせう。』

『あら、今度は笑つてよ！』

『まあ！ あんなに大笑ひよ。』

『かと思へばまた悲しさうな顔をして。』

『今度はすこ笑ひよ。好い子ちゃん、好い子ちゃんですわね！』

斯ういふ言葉は仕切なしに漏れて来る。男の連中も何となく笑ひたい様ないゝ心地になつて来る。

すると復た赤坊は泣き出した。

主人は女中に茶を命じた。やがて茶が来る。熱い茶を吸ひながら主人は口を切つた。

世間ではよく女の獨身論なんかで言ふが、女から結婚といふ事を除いたら何が残るだ

らう？ 疑問だね。

『所が君なんか何方かていへば獨身論の方ぢやなつたかね？』

『其れや然うだ……女に事業が出来るものだと思ひ被つてたからだ……いや仕事が出来ないのぢやない。其仕事は女には子を産む事なんだ。』

『子を産む仕事は少々恐れ入るね。』

『いや然うぢやない。僕は鐵工場を造へるのと同じ權威があると思ふよ。』

『ふむ、まだ鐵工場が！』

『ほんとうだ。過度の時代には事業の爲めに結婚を否定する場合もそれやあるだらうさ、然し結婚もせず仕事もせない女の生命は何處にあるだらう？』

赤坊は皆の手に渡されて居るらしい。泣いては止み、止んでは泣きして居る。

『それに』と主人は言ひ加して『女といふものは子供を産むと一種の權威を持つて来るやうだ。子を産む力は其れ自身が既に一種の不思議だといふ感じがするね。……正直に言へば僕は是れまで、余り然んな事は考へた事はないんだがね……』

『それでもやつぱり朝鮮へ行くのかね？』

『然うさ。妻が子を産むのと僕が鐵工場を造へたり汽車を造へたりするのと同じ理屈だね。然うぢやないか？』

其處へ女連も入つて来てやつぱり八疊の方で話し込む。

皆な好奇心を満足させたというやうな顔色をして目を大きくして笑つて居る。

『なによりも奥さんも、赤ちやんも御丈夫で結構ね』

『ほんとうにね、何んて太つてるんでせうね！』

『まるで繪にある金太郎のやうね』

『え、あの胸の邊の太つてゐるつたらないのね』

『さうよ。乳も兩方高く肥れて、まるで乳でも出さうなのね。』

『私は赤ちやんも、やつぱり奥さんのやうに乳が澤山だと思ふわ。』

『え、私も然う思ふわ。』

『私も、私も。』

『そしてやつぱり此赤ちゃんのやうなお丈夫な赤ちゃんを生むと思うは』  
女も男も一所に笑つた。  
唯だ主人は默然として此喜を悲しんだ。

(一九〇九、八、一五)

おその貞吉

山と山とに挟まれた板留の温泉浴場は早く日が暮れた。貞吉はいよいよ今晚此處を  
出發すると言ふ事を晝の中におそのとしめし合せて置いた。湧盛わきもから手桶てぶくに湯を汲ん  
で坂を登りかけたおそのは、貞吉から此事を聞いて心から吃驚びっくりしたらしかつた。  
『お、妾も行きいす。あなたと一所なら何處へでも行きいす！』  
女の決心は強かつた。貞吉は恐怖を感じた。

187

黒いマントに身を深く包んだ貞吉はおその、肩掛姿から四五間先ぎになつて村を歩  
いた。湯の香が急に足の先に起つて来る、懸崖をつたつて雪の下から。  
貞吉は弘前水力電燈會社合宿所といふ札の懸つた家の前で急に足をとめて、つか  
くと軒先に入つて行つた、そして室の中を覗いて見た。貞吉は二年間此室に住ん

で多勢を世話して居た。會計や炊事の事は勿論、喧嘩の仲裁迄してやつた。彼は晝は會社の事務所へ出て書記をして晩になると合宿所の取締をして居た。室の中は暗く、赤い毛氈が五六枚室の中に亂雑に丸められて、中には人の寐てるのもあるし。

『もう己れは行くんだぞ。』

と言つて見たかつた。庄公の松尾節(浪花節の一種)も聞かれなさいといふ様な感想は色々な此室の追憶の内から幽霊のやうに出て來た。

『馬鹿な』と自分で自分を打ち消して障子から離れた。

『こんな汚ない、こんな寒い所に居ないたつて、人間の住む所は澤山あるんだ』

と貞吉は自分を冷嘲つた。貞吉には温い國の血が交つて居た。父は中國の人で母は小樽の生れであつた。國館の中學を中途にして伊豫の別子に居る従兄弟を他頼つて國を飛び出したのは十七才の春であつた。柔軟かい手に貞吉はハンマアを握つて石炭の香のする所は大抵食つて歩いた。一昨年秋此處へ來たのは此處の技師の余吾澤と言ふ男が別子に居る従兄弟と友達であるといふ縁故からであつた。

貞吉は其處を出た時、おそのは三軒計先の宿屋の軒の下に立つて居た。河向の小屋は雪に蔽はれて真白の、其一番大きい小屋の中からランプが山の方へ向いて赤い光を投げて居る。貞吉は帳場に居る小林の顔を想像した『明日になつたら驚くだらう、何んな顔をして僕等を批評するだらう』と思ふと急に冷たい笑が貞吉の唇から洩れて來る。

『あのランプだつて小林ではなく翁の留守番かも知れない。あんな男は橋を渡つて例の寡婦の所へ入り込んであるんだらう。』

番小屋の上は一帶に水路工事の砂利や石塊で山をなして居る。其れがまた不快な感じを彼に與へた。此仕事が始まつてからもう四人程あの穴の中で死だ。一人は石の破片で頭を碎かれ、一人は石と石に挟まれて、一人は其れを救ひ出さうとして一緒に。今一人は水路の中で生理になつた。雪の爲めに仕事が出来なくなつてからは例のダイナマイトの音も、高く飛ぶ土煙も起らなくなつた。けれども貞吉はこんな仕事には慣れて居たのだ。何も他人が死んだ位で恐怖しと思ふのではない。寧ろ後の方の仕事のなすのは苦しい。幸にも自分の部下の連中丈け十五名丈けは冬季も解雇されなかつた。

少し働けば食ふ丈は得られるのだ、が貞吉は此處に居たくない。唯だ居たくない。一つはおその、戀はもう飽きて居たからだ。

板留の温泉場は彼には黒い塊の様になつて來た。早く此黒い塊を免れたら、一足でも一分間でも早く此黒い塊を免れたい。

マントの冷たい襟を頬に當て、太い呼吸をしながら、貞吉は太股に歩き出した。おそのも少し凍りついた重いワラグツをはいて貞吉の跡を追やうについて行く。二人は中野川と淺瀬石川と合する所迄來た時、何處からともなく崩雪の音を聞いた。偶然おそのと貞吉とは肩を並べて歩いて居た。貞吉はおそのが自分と一緒にだといふ事を初めて気が付いたといふ風にマントを動しておそのに回顧つた。

『おそのさん！』

『……………』

おそのは何も言はずに貞吉の肩へ自分の首をびつたりとくっつけた。貞吉は少し邪慳相に肩をはづして、

『おそのさんお前ね、眞實に行く氣か？』

『なんばうな、あなたてば然した事聞して！』

と不平相に小さな顔を貞吉の方へ對けた。

『だけれどもお袋はそんなに心配するか知れないぞ、僕も函館へ行くつて言たけれども青森へ行つて見なければ、眞正は解らない、僕はまた別子の方へ行くかも知れんよ。』

『わたし、あれ程言つたけし、あなたの行く所だば何うした所でも行くつて…………』

雪は小止になつたけれども、風は烈しい。二人は袋村の橋を渡つて少し河下へ出た。其處には温泉湯と云つて板留よりは少し計り大きい温泉場がある。湯小屋は眞中にあつて其周圍に宿舍が四角に并んで居る。宵の中の町は相應に賑かであつた。湯小屋の湯を打つ桶の音、女湯の笑ひ聲や小供の泣聲も今は悲しい感じを二人に與へた。おそのは急に心細くなつた。

二人は村の床屋の前を通らなければならなかつた、おそのは一足先に通り越した。

貞吉はわざと悠々として其前を通つた。通りすがりに外套の頭巾の下から店の時計を

見て来た、けれども時計と一所に貞吉の目に入つたのは其處の鏡に寫つた男の顔であつた。

貞吉は村の出口の所でおそのと一所になつた時、

『奴来て居やがるよ。』とひとりごとのやうにいつた。

『誰れでいす。』とおそのは足を留めた。

『小林さー奴今夜小屋の當直なんだ。呑氣な奴だね。』

『小林さん来て居いたか、あれまあ。』

とおそのも初めて笑つた。

小林は貞吉と同僚で暫く工務所の炊事係をして居たが文字と算術の少計出来る所から撰抜されて書記になつて、今は貞吉と同じ仕事をして居る。貞吉がおそのを自分の物にする前には二人の間に可なり烈しい葛藤があつた。小林は水力電氣の工事の始まると同時に來たのだから足掛三年になる。其れから一年遅れて貞吉が來たのだ。年も小林は二つ上の二十八だ。

影と夜曲

おそのの貞吉

おその、目には髪を真中から分けた色の生白なましろい大きい顔がはつきりと浮ぶ。おそのが二人に競争される前の年、高等小學校を三年で止めた。親父は娘の小さい時腸チブスで死んだので母と二人で伯父の内に一緒に居た。其頃はおそのは身軀が餘り小さいので村の人はおそのを見れば「ちべ〜(ちび女)」と戯談半分にからかつたものだ。おそのも自分を卑下して自分丈は一並に戀をする事の出来ない片輪だと考へて來た。十七の年迄男を知らない女はまあ淺瀬石川沿岸六箇所の温泉場を尋ねて歩いたつて一人もありはしないのだ。けれども板留温泉場に水力電氣の發電所が出來ると同時におそのはちび女ではなくなつた。貧乏こそしたが親父は立派な男であつた。おそのは一年半計の間に急に發達した。丁度其處へ小林と貞吉が來たのであつた。

おそのは小林と貞吉が二人で自分を競争した頃の事を思ひ浮べると一種の誇を感じる事もあつたけれども、今は其れも苦しい記憶になつてしまつた。小林は女に好かれる性質だつたけれども女を捕へる力がない。貞吉は其れをもつて居た。

『小林は僕よりか確乎しとるせ。僕なんかどうせ旅者だ、薄情者だ。小林は僕よりも

女を可愛がるよ。』

とこんなやみを言つたのは貞吉がおそのを自由にしてから間もなくの事であつた。其時おそのは泣いた、唯だ泣いて自分を貞吉の前に投げた。

二人は道を歩きながら小林の事を考へた。小林に就いて色々な記憶を呼び起した。おそのに失敗してからの彼は急に軀度を一變して、女と見れば誰れでも逃さないやうな色慾二遍の男になつてしまつた事。堂の前から湯治に来て居るあばたづらの五十近い寡婦との關係を思ひ出して貞吉は噴き出したくなつた。

曲夜と影幻

『僕はまた、今夜あたり小林は例のごけさんの所へでも行つてるだらうと思つた。』  
『ふ、』とおそのも肩掛の中で笑つて『然うだね。あの女もあした年してほんとは可笑しいね。』

『それにあの女は子供が五六人もあるといふぢやないか。』

『子供もあるし、孫もありです。小林さんなぞめ、ほんとうの悪縁とでも言ふのだね。』

『何に小林に悪縁も業もあるもんかね。何方も面白半分によぢけて居るんだものな。時が来ると別れてしまはね。』

『然だとも、妾だば、苦しい戀だと思ひます。』

新しく降つて道を埋めた雪は二人のワラゲツの下でキイ／＼と鳴る。田代も石山も薬師寺の森も唯だ一面の雪だ。二人はふりかへつて今過ぎて来た温湯村の方、其れから河上の板留の工事場の方を眺めて見た。時は二人を村から隔て、しまつた。唯だ山麓の釜小屋からは幽かに燈光が洩れて見える。二人は中村の坂を上つて花巻村へ入つた頃は板留一鉢の河地は全く關の内に消えてしまつた。

吉貞のそお

櫓が三臺、泥酔した櫓引きを乗せて来た。彼等は黒石町の居酒屋で飲みつづれて遅い馬に櫓を委せて自分等は其上で餅餅を立て、寝込んで来るのだ。時とすると馬が自分の前へ止つたのを知らないで寝て居るのを短氣な妻君に打たれて目を醒ます事もあるといふ話。もしやといふ恐怖から二人は村の垣根に添つてこそりと行き過ぎやうとした。



『誰れだ。』

最後の一人は橋の上に起きて蹲んで居た。

けれども容易に下りて来さうにもないので二人は道を急いだ。今度は

『誰だば！おめしたぞ誰だ。』

『黒石迄行くんだ』

『でいのでうだ（誰れの家の誰だ）。』

『黒石の者だ。木綿賣だ。』

『ふう、高橋が。』

『あゝ高橋だ。』

貞吉もおそのもはつと呼吸をついた。

橋引が馬に一度當てる前に先よりはもつと高い聲で叫んだ。

『も一人はをなご子だな？』

『あゝ娘だよ！』

『山形の女さいたづらせば、木綿買ねや、さゝか。』

投げるやうに言ひ發つて、氷りついた手繩を馬の横腹に烈しく打つた。馬は雪道を踏んで駆け出した。後は眠いやうな追分が絲の様に聞えて来る。

『なんばうな』と二人は町買の捕虜を逃れた時、おそのは貞吉に對つて『あなた、先刻高橋の娘だつていつたとも、高橋には娘だつけや無いのでござす。』

『然うか、高橋に妻君はなかつたな。』

『あの時凄冷汗が出した。』

『だけれども子供があるぢやないか。』

『子供があつても、赤痢で死にした。』

こんな會話に二人は寒さを多少忘すれる事が出来た。二人が黒石の町へ達着たのは七時半頃であつた。長い山形町といふ町を通つて、前町の四辻の馬車屋の軒へ入り込んだ時はおそのは半分眠つて居た。

此處から浪岡の停車場迄は一里半の間夏は馬車、冬は馬櫓で、一日五回は必然立つ

のである。

二人は大きな店の圍籠裡に足を突込んで、熱てつた手を火にかざした時は、二人は何うしてこんな雪道を此處迄來られたか驚いた程だつた。二人は無言で火をなつかしさうに見つめた。

奥の八疊には馬車屋の主人は酒に焼けた赤い顔をして帳場で何か連りに書き付けて居る。湖縁を敷いた板の間に赤いケントを腰に巻いた馬丁が二人寝轉んで居た。ケントの上には眞鍮のラツバが凍りついた白い緒に付いた儘胸の上に乗つかつて居る。おそのは身の温まるに連れて眠を覺えて來たので貞吉の膝の上に倚り懸るやうにする。メリンスの頭巾の中からおそのの白い鼻筋の通つた顔が覗く。

『寒い目に逢つた時は眠るといけなうよ。』

『然うですが。』とおそのは起き上つた。

暗いランプのない大きい店には火は盛んにおこつて、二人の足からも身体からも白い湯氣がむら／＼とたちのぼる。

貞吉は白い小さな顔を見て憐憫の情を覺えた。けれども貞吉には旅をするといふ生涯の仕事がある。北海道の炭鑛に二年、小坂に一年、伊豫に三年、殊に伊豫の三年は特に貞吉の生涯に一種の色を注ぎ込んだ。一は女の貞操は破り易い、銅鑛を碎くには相應な器械を要するけれども、女の貞操を破るには何も要らない、一は同じ所に居たくない、何處へ行つても食へる、何處へ行つても女の子が居るといふ吾儘な自負。其れだもの女一人を捨て、悔むやうな人間ではない。其れが一種慾望の満足になつて居る。

『おそのさん、お前ね眞實に行く氣か？』

『あれ！ また然うした事を聞かぬいたつて。』

『だれもお袋が何んなに心配するか知れんよ。それに一旦村を出てしまつたらお前二度と村へ來ない覺悟がなければならぬよ。あんな頑固な土地だから歸つて來ても誰れも相手にしやしないよ。さうか？』

『あなた、然すと妾ごと捨てて居る氣ですか？ ほんとに、あなたは恐怖しい人だね。』  
おそのの目はしばた／＼して居る。

『なに、然んな事はないうさ、唯だ僕はお前の身の上を心配するんだ。』

『だはで(だから)妾はあれは言つたけし。妾は何うせ村の人から悪がられて居るの  
だはで、何處も行つても誰れも何んとも言はなうして。』

『うむ』と貞吉は氣のない返事をして、巻煙草の吸殻を火の中へ投げ込んで居る。

『あなたに妾の心が解らなうのが、わ、わたし眞實に口惜しい……』

と女は忍び泣きに泣いて男の身軀にびつたりとくつついた。火の様に熱してゐるおそ  
の、頬は冷たい男の頬に觸れた——暗い室には二人の外動くものもない。

間もなく黒石の町の商家の戸を下す音を聞いて馬橋は町を出た。二人の外には子を  
脊負つた四十五六の主婦と干鮭を巻にして下げた老人が一人。凸凹の多い冬道を橋は  
波の上のやうに揺れる。おそのも貞吉も橋には慣れた方であり乍ら随分苦んだ。子供  
を脊負つた主婦は道の中頭で橋の中に嘔吐をついた。其の臭氣と貞吉の吸ふ煙草はお  
そのを苦しめた。おそのも嘔氣を催した。貞吉は寶丹を飲したり肩を撫せたりしてお  
そのを看護した。

ステーションに就いた。雪を冠つたシグナルは赤い青い色をして深い嘆息をついて  
居る様に見える。

二人は旅亭の店から流れて出る弱いランプの光を浴び乍ら、ステーションの境内に  
入つた。其時はもうおそのは病人の様であつた。今迄深く面を包んだ頭巾は取去られ  
てしまつた。人が見るといふ事も然う氣にかゝらない。唯だ頭が痛む、胸が苦しい。ぐつ  
たりと貞吉の肩にもたれて低い呻吟聲さへ洩れて来る。中には人が十人程火の周圍  
に立つて話し込んで居た。ストーブと言つても、唯だセメントを四角に切り取つて、  
其れに石炭の屑を澤山盛込んで居るばかりだ。

二人は人群を避けてベンチに腰を下した。二人は何んとも明瞭言へない様な魂を考  
へて居た。貞吉のは明るい光るもので、おそのは黒い濁つたものだ。貞吉のは未來でお  
そのは過去と現在だ。

貞吉には板留の温泉場も弘前の水力電氣も何にもない。未來の吾儘な生涯、温い國若  
い女の居る所、凡て然ういふものが一つの光明の塊となつて目の先にちらつて居る。

未來はおそのにはなかつた。唯だ今捨てた自分の郷里の事と、今の此苦痛は冷たい石塊の様に胸に壓して来る。一圖の感情が醒めて来るに従つて、子供らしい、親一人の母——を憐れむ孝養の情が何處からともなく湧いて来た。彼は三年以前のちび女の、自分を卑下する冷かな心を恢復した。さればとて今更ら何うして村へ歸られやう。おそのは貞吉の自分に對する冷かな態度を初めて知つた。がもう遅い。電信の音はかち／＼と響いて来る。

青森行の五番は今三十分の後には此驛に来るのだ。

貞吉はまた質問を試みた。

『おそのさん、お前ね眞實に行く氣か此汽車で？』

『……………』

おそのは肩掛をベンチの上に圓めて顔を其れにつぶせて居る。

『おら、行かれるかつて聞くんぢやないか。』

おそのはやつぱり返事をしない。髪はぶる／＼と震へて居た。

暫くして、おそのは、

『小澤さん、妾はほんとに口惜うございますー だごも(ですけれど)、かう橋や車に酔ふ様ではとつても長の旅も出來ないし、舟にも乗れないはで……どうしたらいいやう？』

貞吉は勝利を叫んだ。おそのは泣いた。

『早く然ういへば何にもこんなに苦しみやしなかつたんだ。然うだお前は好く斷めた。それに來年になればまた僕も來るのだからね——ね其れ迄待つて居てお呉れ。』

『あゝ』とおそのは青白い顔を上げて、

『さうぞ。さつとでさーえー！ 來年の春になつたらさつとでさーえー！』とおそのは涙と一緒に言つた。

汽車の着く前貞吉はおそのをステイション前の旅亭に連れて行つて、其處の主婦に『明日黒石の橋が來たら此女を乗せてやつて呉れ。』と頼んで置いて、それから涙に濡れたおその、手に二圓計の金を握らした。貞吉は五番の流車に乗つて何處かへ行つて

しました。

翌朝おそのは馬籠で黒石町まで送られた。能く晴れた湖であつた。おそのと同村の町買の女連が例の四辻の馬車屋の軒に立つて主人に談判して居る最中へ、おそのはひよこりと櫓から出た。村の衆は皆な『おつてん』しておそのを圍んで男の薄情と女の粗忽な行爲を罵つた。其れから町買の品物の中へおそのを積み込みやうに乗せて、そして村へ連れて行つた。おそのは村には居られなくなつて。今は北海道の伯父さんの所に居る。貞吉の子は宿さなかつた。

(一九〇九年、一〇)

## 最初の宿

—

一九〇〇年の秋の初頃の事だ。ある北國の火山湖のはとりの、ある鑛山は全く仕事を中止しなければならなくなつた。この湖のはとりのピラミットの中では銀がうなつて居ると言はれたが、殆んど三十年間に其れが皆な掘り出されてしまつた。

最初の宿

山を少し登れば、湖水が再び目に入る。

「父ちゃん湖が見えるよー」

と少年は並んで山を登つて行く、五十位の丈の高き男に言ひかけた。

「湖はすこし荒れて居る。」

「父ちゃん船は一艘も出て居なされ。」

と言ひながら、また頭を少しさげて歩いた。

少年の呼吸は少々の音を立て、来た、が力のある父の足音は少年を激励した。少年は兵隊のやうなませた歩き方をして、時々口笛をちやうど唇から漏す。

二人は、山から流れて来る水が美しい瀧をなして居る邊で一寸立ち止つて、其下の深い瀧壺の方へ目を投げたが、彼等は此日の長い旅行を思ひ出して再び足を運んだ。道はだん／＼せまく、けわしくなつ来た。父は今度は少し先に歩いた。

道の兩側はぶなの木やならの木の手が縦横に組みあつて、其の間から白い鱗のやうな雑木の皮層は氣味の悪い色を葉蔭に表して居る。少年は嵐の晩に能く山が鳴るのは、山の木と木が摺れあう爲めだといふ事を聞いて居たので、此處を通りながら、あゝる嵐の晩を想ひ起した。

彼等はある山の中腹を一周して、やゝ開けた谷間を添ふて進んだ。此邊には嶺山の隆盛であつた頃、道に埋めた角材が墓のやうに横になつて、其腐れた部分から力のない雑草が群をなして生へて、秋の弱々しい日光に熟した實を撒いて居た。

少年は悪い星を頭にいたゞいて生れた。彼は、大概の少年の持つて居る好奇心を驚くは怪澤山もつて居た。

「早く歩かないと日が暮れてしまふぞ、おん／＼危うい」

父は何返、子供に注意したか知れない、けれども、子供には底知れぬ深い谷、其の谷の胸の上をさら／＼と流れて行く水の音が何とも明瞭した理由なしに、非常になつかしいものに思はれた。

「此の藪の中から流れて行く水が、谷へ下りて行く、其れが互に重り合つて、……溶爐の手前で二本に別れる——一本は町へ……それから湖へ……」

少年は、も一回返願つて自分の捨て、来た町の方を見た時は、突き出た山の端が湖を隠してしまつて居た。

父は子供と并んで話した。

「私達はお前が二歳になる時、此處を通たんだよ。お母さんはお前をおんぶして居た。」

「父ちゃん、それから私達は何處へも行かなかつたんだね」

「むう、然うよ。私は其時から前日鑛穴の中にはかり入つて居た。私は穴の中に居てもお前の聲は聞けたんだ……お前は少い時から病氣ばかりして居た。」

少年は父の言葉を意味あるもの、やうに聞いて、そして一種デリケートな感しを以て小さい身體を振はした。そして聞いた。

「父ちゃん、私は何うして斯う弱いんだらうね！」

「なに！」と父は子供の方を回顧つて、

「弱い事はないさ……お前も本ばかり讀んで居ないで、早く働くやうになれや、丈夫になれるんだ！」

少年は、何故本を讀めば人間が弱くなるのか、理解する事が出来なかつた。

二

二人は、谷を出て、山の背の道を歩いて居た。

父は飾色になつた摺り切れたセルの上衣に、犬の頸環の様な太い皮緒を締めて、それに新しい草鞋を四足結び付けて居た。彼は急に立止まつて、子供の方を見て云つた。

「もう草鞋を換へやうか？」

二人は泥のついた草鞋を藪の中に投げて、そして疲れた足に、新しい草鞋をあてた。

ふと少年は母の事を思ひ出した。彼の母は此旅の同行者であつたけれ共、足の弱いのと、子供や荷物を運ぶ必要から二人の出發より二時間許り前に、車に乗せられて、此山を越へた。車の上には、四角な箱の様な物がついて居た。

その車の中には、此の廢れた鑛山から逃れて行く外の大勢の坑夫の妻や子供が集つて居た。泣いたり、笑つたりする此連中の中に、少年の母が二歳になる男の子を抱いて乗つた。子供は鋭い聲を立て、泣いたが、其泣聲も今も尙二人の頭腦の中に鮮かに残つて居た。

「父ちゃん、母ちゃんはどう着いたらうね？」  
 「むにや、未だ着くまら。」

こう父は答へた。子供は柔かい屈辱をもつて、無言のまま歩いた。

道は湖水を圍んだ大きな山の脊を螺旋狀に導かれて居る。二人は谷の見えなくなる頃、急に止まつて湖の方を回顧つた。山も谷も今は湖水の面を隠しては居なかつた。湖水はその蒼い胸を廣い空の方に向けて居た。

「父ちゃん、湖がまた見えるよ。」

「もうこゝ迄来ると波の立つて居るのも分らない。よく湖を盆のやうだと云ふが巧い事をいつたものだ。」

「だけれども、父ちゃん、私には湖は盆のやうには見えやしな。」

少年には湖に盆のやうだと云ふ形容を用ゐる此國の思想の貧弱なのが可笑しく思はれたのであらう。

彼は坑夫の子供ではあるけれどもユスモポリタンの血が其十本の指に流れて居た。

湖水の面は時々流れて来る水蒸氣の層によつて洗はれて居た。子供の眼險は疲勞によつて強く押されて居たけれども彼の眼の玉は樂しげに動いて山と山とに圍まれた谷間を越えて、灰色の空虚を眺めた。

山一つ越えると、今迄と全く違つたやうな光景は父と子の前に開かれて来た。今迄彼等の通つて来た谷や雜木の群のかはりに、青い草に蔽はれた山の流が幾筋となく並行して流れて居た。

目標の無いやうな彼等の旅ではあるが、其最初の宿が漸やく近づいて来た。少年も今夜自分等の宿るべき或る鑛山の町を相像して胸を跳らした、少年は其の町で生れたと云ふ事は父からも教へられて居たので、何となく故郷と云ふやうなイリュージョンを得たのであるが、それとして彼等の旅行の最後の土地では無いと思へば其の蔭には一層大きな恐怖の塊をもつて居る。

二人は少し小走りに山の斜面を下りた。鑛山によくあるやうな草の少ない赤い地面



は廣く手をひろげて平原の方へ向かつて居る。少年は今夜の宿のことについて父に質問をした。

「父ちゃん、私達は何故この町に永く居られないの？」

父は少年のこの問には答へずに進んだ。干涸びた兎の糞が草原や赤土の上に黒い點を落して居る。この邊からは鑛山通ひの馬の足跡が黒い假面のやうに押し残されて居る。間もなく平原の端の方に煙突の煙が大きな渦を巻いて天にのぼつて居るのが見えて来た。

曲夜と影幻

父の大きな口は強く結ばれた。そして少年の心臓は強く打つた。

三

夕日の赤く照した賑かな町を、父子は乞食のやうな風體をして歩いた。其兩側の岡の上に器械の音が、しきりなしに織られて居る。器械場の建物は、多くは白く塗られて、奇麗に刈り込まれた芝生が道路に接して居る。

少年は町へ入つたら急に臆病になつたやうに自分で感じた。知らない町の少年と逢ふのが耻しく思はれるので、父の左に隠れるやうにして歩いた。

石炭の臭がして来る。器械の音が益々複雑になつて来る。職工の群が紺色の仕事着に辨當を下げて二人と摺れ違つた。

ある小學校の前に、大勢の小供が群をなして遊び戯れて居たのが目に入つた時、少年には耻しいよりも怖しくなつた。父と一緒にだとは思ひながらも、何となく氣遅れがして、自分の歩き方が氣になるやうだ。

最初の宿

「こゝだ。こゝへ入るんだ。」

と父は足を止めた。子供は安心した。

其處には寫眞屋があつて、其横丁の入口に馬車が繋がれて居る、其馬は見覺のある馬だといふ事が少年には大變にはやく感ぜられた。馬は鼻のところに柔い白い毛を持つて居る。

少年は足跡の多い其露路を入つた。直ぐ其處は庭の入口になつて父の友達の持

つて居る下宿は其庭を隔て、見られた。母は子供を懐いて父と少年を迎へた。其外臺所口には頬片に大きな瘡のある男と、其妻君らしい女がゐて自分等の方に目を投げて居た事も少年には直ぐに感付かれた。

親子四人は再び對ひ合つた。室は矩形の庭を抱いた三階の隅の一室、其室の壁には一八九四年の戦争の繪が一面に張りつめられて、それが少年に不快な婉い感じを與へた。母は、今日の車の上の出来事を父に報告するにいとがしかつた。

車の上では少年の母は餘り好遇されなかつた。少年の母は感情の強い割合ひに口數が少かつたのだが、旅に出たら却つて元氣づいて居るやうに思はれた。

「飯場頭の奴等は何處へ行くと思つた。」

と父は大きな扁平な茶碗を膳の上に投げるやうに置いて聞いた。

「何うして私にそんな事が解るもんですか！あの人は此處へ着くまで息子の自慢で持ち切りなんだもの。」

母は案外若々しい言葉で甘へるやうに言つた。少年には父と母の會話はあまり興味ありさうには思へなかつたので、今日背負つて來た自分の風呂敷を解かうと思つた。

「あの人の息子さんはアメリカに居るさうですね、そして其息子さんから今に大した金が來るんだつてね。」

「息子が一人あつたにはあつたが、死んだが生きてか解らないんだ。あれの亭主が私に然う言つた事がある。そして外の連中は行く先きがもう定つて居る風かね？」

「いゝえ、まだ大抵定つて居ないやうでしたよ。でも此町で働かうといふ人も大部あつたやうです。」

斯ういふ話をして居る處へ下宿の主人が二階へ來て父と會談した。

少年は主人と父との會話の模様で、其人は長い問答の世話になつた人で、ある時の運動にも加味したのだといふ事が解つた。面貌に似合はなく聲のはつきりした人で、そして理解に富んで居る人らしく思はれたので少年は其人の云ふ事に注意を集中した。

其間に少年の母は子供を寝かす爲めに室の隅の方に横になつてしまつた。

少年の眼の上に眼が襲つて來た。彼は母の傍らに、靜かに横になつて、そして間もなく細い肝聲をたて、熟睡してしまつた。

主人の室を去つた後で少年の父は室の中を見廻して、そして大股に歩きながら時々子供等や妻の寢姿を見交はした。(一九一〇、三、廿五)

## 二人の世界

金さんと爲さんといふ二人の盲人が、うすく曇つた秋の朝を坂を下りて、石切橋の停留場の方へ歩いて行く。

界世の人二

坂の下には雜然とした物の音が聞えて居る。金さんは白木の櫛杖を右手にさげて、爲さんの袖口をかたく握つて、そして足駄をからこるさせる。爲さんの左の眼は餘程見えるので、全くの盲人とはいへない。従つて金さんのやうな重い棒を携帯する必要はない。左の手を内懐うちよこみに、顔をすこし右の方へ曲げて、まぶしさうな顔つきをしてゐる。

二人が黒田學校の角を通り抜ける時、黒い袴を着けた丈の高い女教師が、二人の顔を急いで右に避けて行く。爲さんは立派な女だなと思つた。金さんにはそれが見えな

かつた。

「ヤー按摩さんだよ」

「二人ながら按摩さんだよ」

金さんは初めて笑つた。あばたの少しある頬を曲めて、

「ハハハ、二人ながら按摩さんなら可笑しいかな。」

「按摩が何うしたんだい！ 子供ていものお馬鹿なもんだ。二人ながら按摩さんだよつて、人を馬鹿にして居やがる。な金さん。」

爲さんは子供らしい顔を眞赤にして怒つて居る——然し金さんは『うむー』と言つて見たつきり、にや、にや、と頬片を動しながら笑つて居る。金さんの手はやつぱり爲さんの袖口を握つて居た。

肉屋の角から水道町へ入る時、黒田學校の方で大勢の子供等の口笛がして、

「ヤー按摩さん笑つてらあー」

といふ聲は何處からともなく何邊も響いた。今度は金さんは爲さんの首の所へ

頰をくつつけるやうにと言つた。

「だから」あ、些たあ違ひけれども傳通院から乗らうかてたんだ。」

「何にかまうもんか。」と爲さんはうるさうに、首を金さんと逆の方へ持つて行つて、

「按摩は泥捧しやしめいし、かまうもんか威張つたもんだ。金さんそれだから」嫌ひさ。按摩だつて何にもさう小さくなるに當らねえ。」

「其れも然うだね。」

「其れも然うだぢやねえ。當前だよ。」

「當前なら食べやうか？」と首をさぐりめた。

「まづい酒落言つて居やがらあ。」

「ハハハハ」

「自分でくだらねい酒落言つて、笑つてりあ世話ねえや。」

「ハハハハ、今度は杖でこつくと頭を叫いた。

「金さんお止しよ、みつともねえー」

橋の上で金さんは臆病さうな最後の笑を發したので、停留場で終點から来る電車を待ち受けて居た人々の顔は、一樣に二人の方へ向けられた。爲さんはなまなか世界が見えるのでいやになつた——金さんを連れて來なければよかつたと思つた。けれども一人なら尙ほ來る氣がなかつたのだと思ひかへして、親切に金さんと并んで停留場の處へ行つた。

「按摩さん。」

「按摩さんは杖を脊負つてるよ。」

「ほんとにね。あんな立派な身體からだして惜しいもんですわね。」

「あれで小さい方は年老つて居るせ。」

凡て斯ういふ言ひは、一ダブス計續けさまに人集ひつなみの中から起つたが、最後に細い透通すきとほるやうな聲で

「やあ、按摩さん笑つてるよー」

爲さんは、そつと金さんの顔をのぞいて見ると、金さんは例の通りいやな笑ひ方をし居る。困つたなとは思つたが何うする譯にも行かない。

電車が來た。六七間を置いて、二臺の電車が疾走しつそくして來た。二人は後の車が空いて居るだらうと思つて、少し待つて其れに乗り込んだ。金さんは爲さんの座つた所へ、何處でも腰かけやうと思つて居たが失望した。爲さんは、そんな氣のきいた人ではなかつた。右手に空席あきせきが三處位はあるのを、左手の真中頃の、フロックコートフロックコートの紳士と和服を着た支那人の學生との間に、びつたりと押しつけられるやうに腰を下してしまつた。爲さんの對側むかひがはに空があるかと手を出して見ると、大きな風呂敷が一つ。其次ぎは四角な洋書。其次は笑ひ聲。やう／＼の事で戸口に近い席を見つけて、金さんは小さな腰を下した。——車は走りだした。

二人の乗つた電車は、出水の跡の濕つた道を、烈しい音を立て、行く。河水の岸を打つ音は電車の中に居ても聞かれる程だ。

日が照つて來たと見えて、ほんのりと温かい空氣が金さんのこゝみかげんな脊中を包む。電車の中でもいゝから、一生涯かうして腰をかけて居たい。あんな臭い植木屋

の小屋に寐て、朝から晩迄、穢い裏長屋の主婦の腰を摩んだり、頭のはげた土方の親方の脊中を叩いたりして、其金は皆な親火の雛腹を温める計りだ。――  
 「だからよ。お前も、ちつたあ樂に氣を持たねいのア僞だよ。いくら稼いだつて、其金がお前やわたしの手にでも入るなら知らぬこと。」

とお袋は己れの手を握つて泣いたつけ。けれど「意久地なしの業つく張り」の「助兵衛翁」の言はれて見れば逆に親に同情して、無理に弱い身體を押ししても稼ぐ氣になる。金さんは隣の商人が其向ひの商人と、商買上の話から、此間の音羽の出水の事を高く話し込んで居るのも耳に入らず、連りに家の事を考へて居た。  
 怒つても見た。笑つても見た。

金さんは爲さんのやうに世界が見えないから、腹だしい時はすぐ怒つた顔をする可笑しい時はすぐ笑ふ事が出来る自由を持つて居る。

「夜だつていからたまりませんや。」  
 「然うでしたか。夜でしたかね。」

「十二時頃からそろ／＼水が出たさうですよ。」と金さんの隣の男は四角な洋服函のやうなものを、金さんの右肩の所へ押ししてよこした。金さんは怒るよりも其四角なものが何んだか確めて見る方が餘程趣味があつた。そつと右手を箱へ當てゝ見た。長さは別らないが深さは五寸位あつた。角々には針箱の角へ喰つけると同じ位の金具を打ちつけて居る。こと／＼と人さしゆびで金具を打つて見た時、商人は邪険さうに其箱を金さんの領分から持つて行つた。

「はあ／＼怒つたな。」

と思つて見たが、商人は別に怒つた風もなく、前と同じやうな調子で話をして居るので、金さんは安心して笑つた。

「何ね變にかう板敷の下が鳴るもんですから、内の中は初めのうち泥棒だらうと思つたさうですよ。其内店に寝て居た若衆は寢床の中へ水が入り込んで来たもんだから急に飛び上つて擾ぎ出したんです。其れから座敷に寝て居る子供をおぶひだす。亭主は主婦の肩掛へ帳簿を包んで小僧に渡す。まるで戦争のやうだつたさうです。」

金さんの隣の商人は中々話上手で、色々な形容の言葉をつけ加へて話するので、自分の事は忘れて此會話に耳傾けた。

飯田橋あたりで、向ひの商人は下りたと見えて、隣の商人も黙つて一言も言はなくなつた。然し例の四角な箱は確かに金さんの羽織のところを突いて居る。

「長火鉢が座敷の中を浮いて歩いた」

といふ言葉を思ひ出して、金さんは餘り面白いので、つひ笑ひだした。

九段の坂の下で金さんの前が空いた。爲さんはぢつとして其一つに腰を下した。金さんは爲さんが自分の前に来たといふ事を直覺して、一種言ふべからざる愉悅の情を覺えた。出来ることなら爲さんと并んで居たい。喧嘩してもいゝから爲さんと二人肩を并べて居たいといふ情が金さんには溢れて居る。然し爲さんには其れだけの情がなかつた。また情のない事をもつて一種の誇として居るやうな所もある。何故つて彼は安住の人ではない。明暗二個の世界に跨つて居る人であつた。

爲さんは金さんのやうに生からの盲目ではなかつた。十三になる時親類の縫箱屋へ

奉行に行つて、十六の年の春眼病にかゝり、一時はまつたくの盲目となつたのを、幸に「荒井の薬師様へ願懸けして、斷物までして直はしていたのであつた。左の目の少しばかり開いて居るのは、即ち其の結果であつた。とかう爲さんのお袋がいふので、爲さんも然うと計り思ひ込んで居る。

何處の停留場からか知らんが、支那人が多勢乗り込んだ。何かべちや〜と喋舌りながら二人を交りぐ〜に見て笑つて居る——丁度三年前に自分等が然うされたやうに。

金さんの親父は養育院の植木屋をして、朝早く四角な辨當箱と南蠻をさげて大きな門をくいる時、門の傍の四角な箱の中から目鏡越しに、くばんだ目を光らすのは爲さんの親父さんである。これが一つと、二人は等しく盲人であるといふことが爲さんと金さんを結び付ける理由になつて居る。

駿河臺で金さんの隣の箱を持つた商人はやう〜の事で下車した。金さんはまた笑ひ出した。そして爲さんに此處へ来いといつて、右の腰懸臺をばん〜と二三度叩いて見せたが、容易に来ない。其辨電車が發車してから例の長い身體をのそりと動かし

て、悠々と金さんの右へ腰かけた。そして金さんの耳へ口を當んばかりにして言った。  
東京に支那人は何人居るだらう？

「さあ」と金さんも首を曲げて

「百人や二百人ぢやきくめいな。」

「一體日本へ何しに来やがるんだらう。」

「それや御前學問に来るにきまつてるぢやないか。」

「學問する積りで、探偵に来て居る奴もあるつて野村さん(養育院の事務員の名)が言つたが眞實かね？」

「さあ」と金さんは益々眞面目になつて、

「事によつたら、然うかも知れないな。其れに野村さんは軍人だから一番よく知てらあな。」

も一返電車の線路は交錯した。

型に入れたやうな車掌の聲は響いた。

二人は上野行と決心して車を下りた。金さんは爲さんの羽織の背縫せみひの所を無雑作にむしり取るやうに握つて、棒を少し動かして作らつて行く。

「何でもいゝから聞いた方が得だ。」

と金さんが主張するに拘はらず、爲さんは容易に口を動さない。唯だ彼方へ行つたり此方へ行つたり一向要領を得ない。——金さんは仕方がないから、爲さんの羽織を離した。

其處に塗のまだはんたうに乾かない、圓の柱が立つて居る。金さんは手を出して恐怖おそしやうに觸つて見て、撫せ下して來ると、粗末な腰懸の角に指の先が當つた。

「只で座れるのぢやないか。」

と思つて、少ししやがんで手をやつて見ると、ガラスの蓋のついた箱が番人も居ないで腰懸の上に載つかつて居る。

女の笑ふ聲がして、續いて若い男は何とか金さんに對つて言たやうであつたが、少し吃驚したので分らなかつた。



「きたないね此人は。」と低い女の聲がして、間もなく細い指が金さんの脊中を軽く突きた。

「あんさん。何處へ行くの？ 道を間違へたんじゃないの？」

「……………すみません」

と思つたが仕方がない。黙つて居る。

「煙草の箱を何うしやうてんでせう？ ねえ……………」

「ねいさんと、まちがへたんだらう！」

と話しかけられた男が言ふと女も笑つて、お負けに

「人を馬鹿にして居るよ。」と附け加へた。

其處へ爲さんは大急でやつて来て、ばんやり立つて居る金さんの手をぐいぐいとひつぱつて行く。

車に乗る少し前に、爲さんは金さんの腰へ手をやつて、急に笑ひ出した。金さんは腰に手をやるまでもなく自分は朝家を出る時から尻を端折つて居た事に氣がついた。

「見つともねいから町へ行つたら下すんだよ。乞食あんまのやうに見えるから——金さんも氣をつけてね。」

と爲さんのお母さんが教へたのは、だと金さんは思つて、急に笑ひ出した。

爲さんはまた笑つた。金さんはもつと笑つた。二人は可笑てく／＼堪らなかつた。

電車の窓から五つばかり顔が覗いて、此笑の原因を見出さうとしたがどうしても發見する事が出来なかつた。唯だ二人の按摩がにや／＼笑ひながら入つて來た計であつた。

今度の電車は先よりは客が多かつた。兩側の席は一杯であるし吊皮も餘つて居るのは少なかつた。

金さんと爲さんとはやつとの事で、其内から二つ丈けを見つけてぶらさがつた。二人は生中腰を懸けたよりは結句樂だと思つた。大きな坂と長い町を電車は通る。二人の立つた兩側は女連であつた。

「叔母さん、いゝあんばいね。御天氣になつたわね。」

と爲さんの方に、紫の羽織が言ふと、

「然うね。今朝の分では何んだか危なかつたね。」

金さんの側の方のは肥つた年増の主婦らしい女であつた。

金さんは自分等の腕の下で言葉を交して居るのだなと思へば、妙に可笑しくなるので、またにやりと笑つた。

然し爲さんは少しも可笑くはなかつた。却つて怒り飛ばしてやりたかつた。といふのは爲さんの方の娘は、いやに自分の顔を見て冷笑してゐる。奇麗な紫の羽織が自分の赤まんの新しいのに觸れるのを大變に氣にして、始終前を掻き合せて居た。然も其れが金さんの方の年増の女のさしがねであつたのを發見して實に憤慨せざるを得なかつた。

幻影と夜曲

「女に席を譲る規則があつても按摩に席を譲る規則はないものと見える。」

といふやうなことを思ひついたので、不快で／＼堪らなかつた。金さんは、やはりにや／＼と笑つて居る。

電車は長い町を右に折れて、亦長い町を走つた。爲さんは町の名を二三遍呼んで金さんを促したけれども、金さんは身體をいやにこめてもぢ／＼して居る。

「按摩さん氣をお付よ。——あゝ痛々ひどい按摩さんだよ——まるで足がつぶれてしまふかと思つたよ——あゝいたい。わたしひどい目にあつたよ、お負けに棒で肩を突ツつらて——」

「痛かつたでせう！ 叔母さん……誰か按摩さんを懸けさせてやれやい／＼なんですのね！」

二人の世

「目の見えないものを第二一人で歩かせるのが間違つてるわね——可愛相に……」  
車中の人は皆な其方へ顔を向けたので、娘は顔を赤くしたが年増の方は却つて元氣づいて金さんの固く眠つて動かない、静かな目をにらんだ。

金さんの目は静かにしばたゝいた。爲さんの唇はふる／＼と震へてた。然しいかんとも仕様がなかつた。車内の人とても兩端に居たものゝ外は大抵娘と年増の顔を見ていかにも同情したといふ風であつた。

二人は切通を下りた。池を一周した頃は、もう電車の中の事などは忘れてしまつて居た。

「温けいな。まるで夏のやうだ。」と金さんが言ふと、爲さんは高い肩を金さんに并べた。

「辨天様へ入らうか？」

「うむ入らう。」

二人は石橋をさはつて見たり、背の高い金佛をさすつて見たり、お終ひにはいやといふ程鰯口を鳴して其音を聞いて喜んだ。其れから臺の方へ登つて精養軒の前から山に登つて、大佛の蓮臺に頬をつけて、指で叩いて見たりするかと思へば、竹の臺の草原へ寐ころんで心ゆくばかりに秋の空氣を吸つた。

時々人の足音がするけれども、別に二人を追及するものでもなかつた。

竹臺を一周して二人は西郷の銅像の前へ來た。金さんは疲勞れきつたやうに鎖の上に腰を懸けてしまつた。右の手に杖を突いて、左の人差指と中指を揃へて眼窩を強

く押して居る。爲さんは金さんの前にしゃがんで、両手で金さんの杖の下を握つて、これも黙つてしまつた。

臺の下には東京の町がいろがしく動いて居る——淺草の觀音が見えるとか。本願寺の屋根は大きいとかいつて驚かして居る人々の聲はしきりなしに聞える。

然し二人は別に見ようとはしなかつた。唯だ二人は急に空腹を感じて來たので、臺を下りた。

「何かやらうね、爲さん。」

「む、何かやらう——」己らのお腹が空いた——

「む、己れもすうた——」と右腹を下りてしまつた時、爲さんは答へた。

明治四十四年六月七日印刷  
明治四十四年六月十日發行

著者 秋田德三

發行者 東京市小石川區高田豐川町四三  
岩崎勝平

印刷者 同 小石川區小日向壘町三丁目  
佐伯外美雄

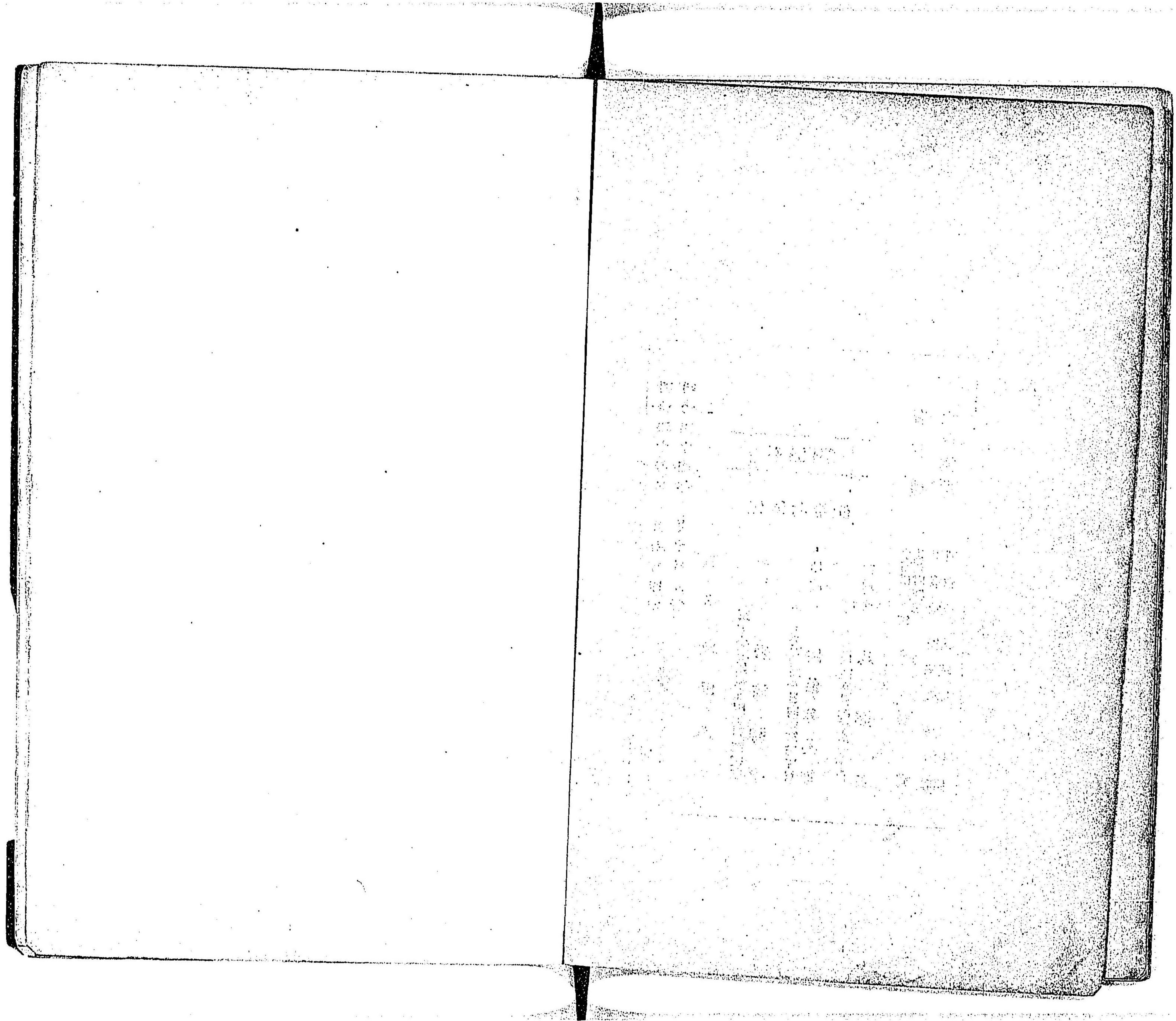
印刷所 同 小石川區小日向壘町三丁目  
八洲舎

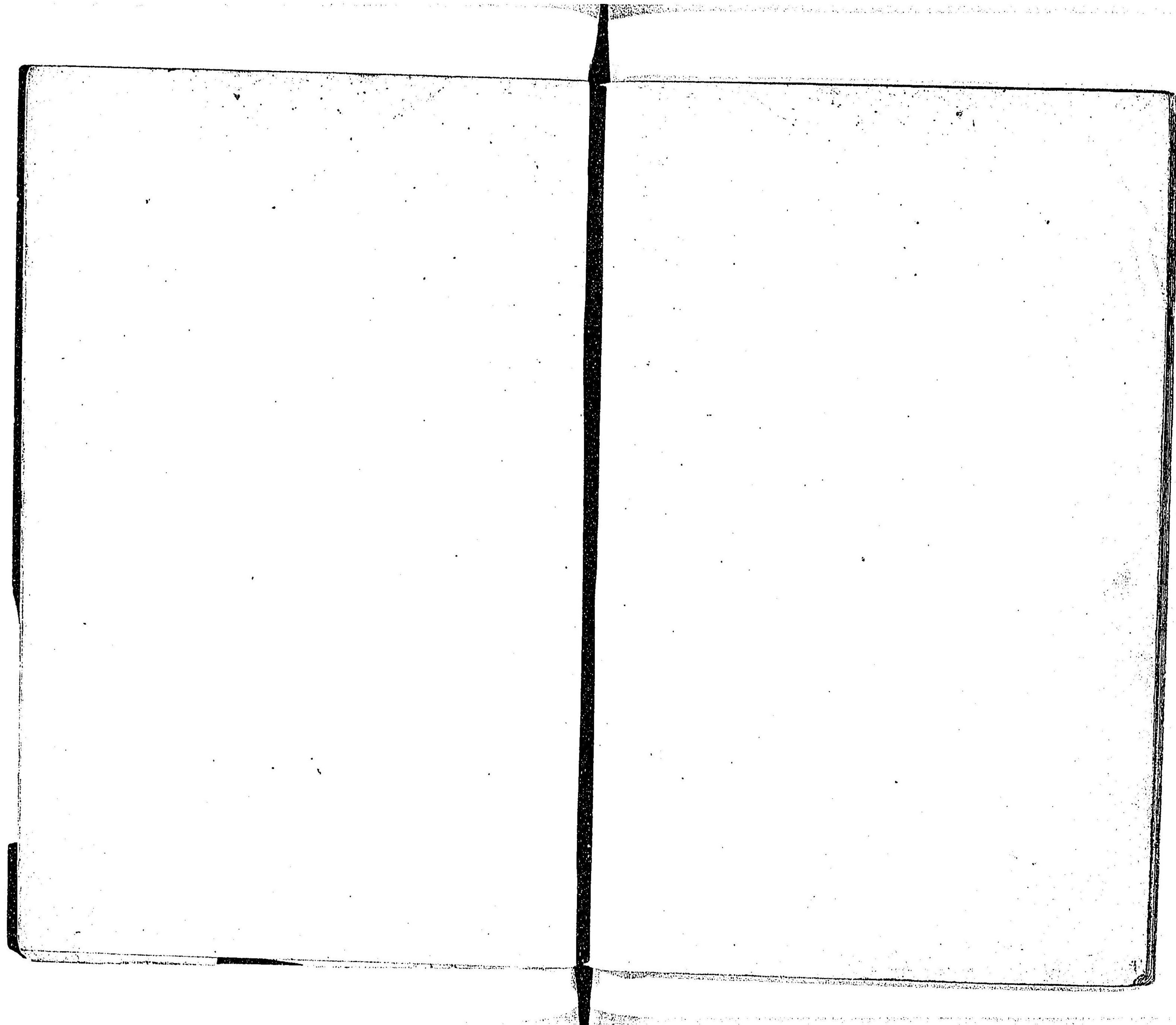
不許複製

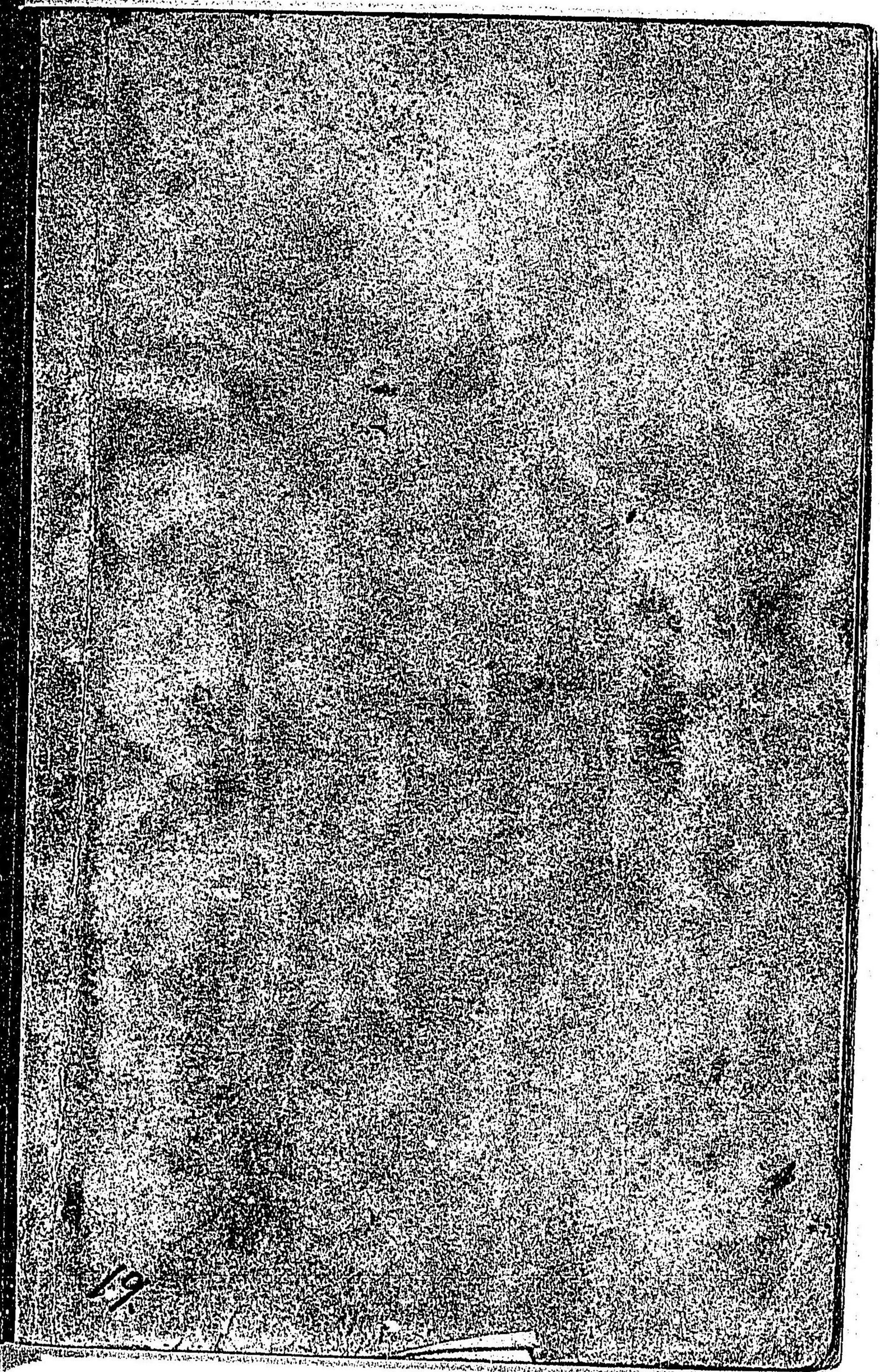
定價七拾錢

發行所  
大賣捌所

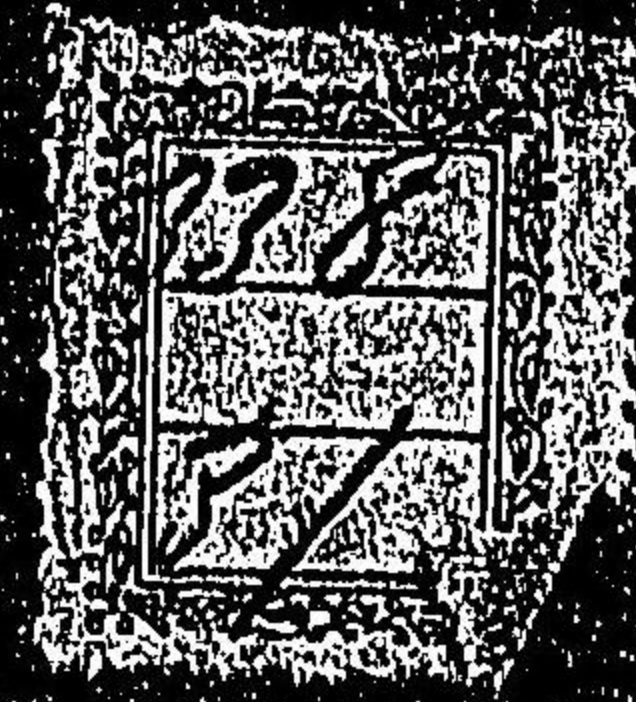
小石川區高田  
豐川町四三  
新陽堂  
東京 武藏  
海峯堂 誠屋  
堂 上北  
隆屋館



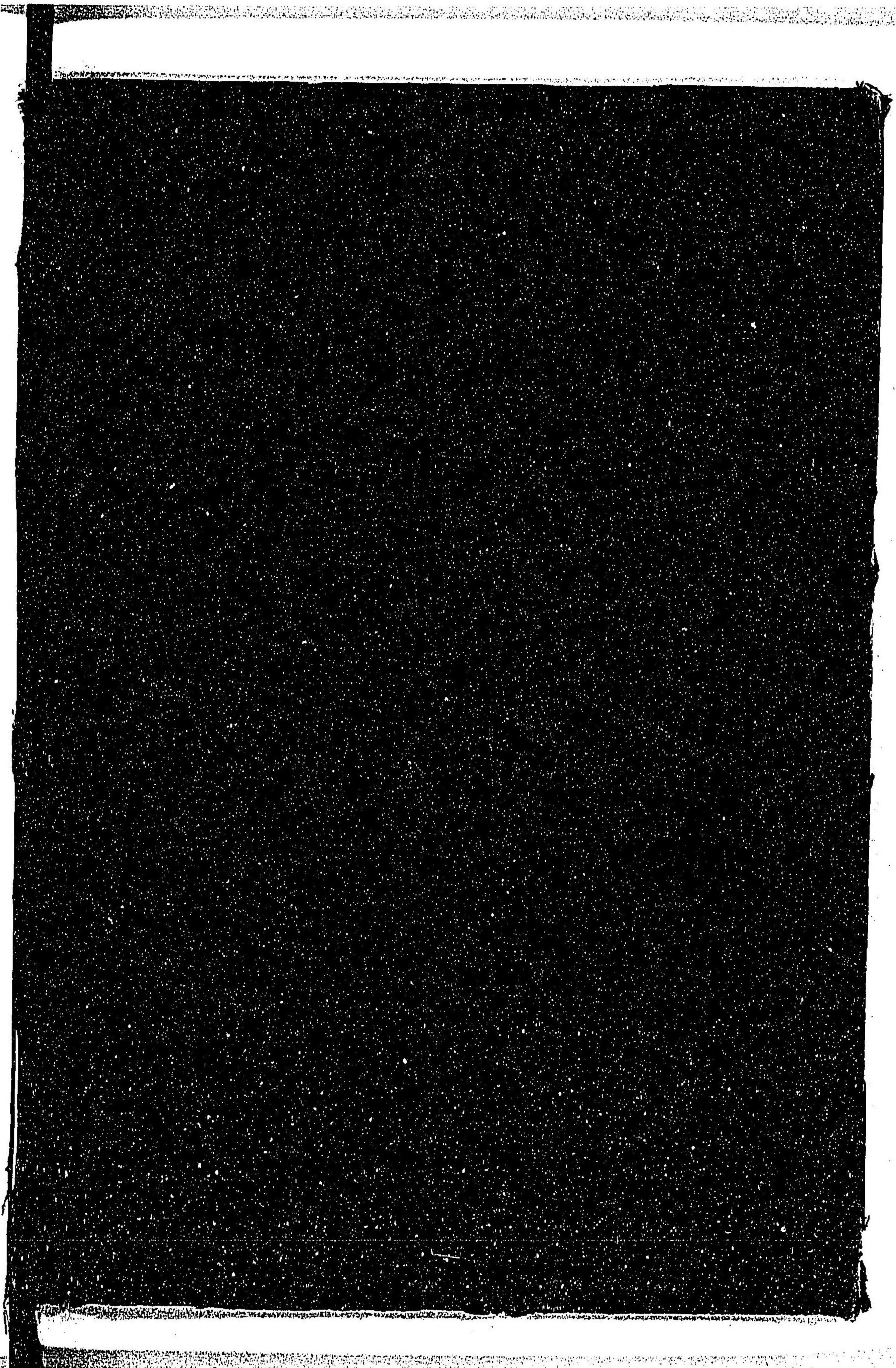




19







338  
31

084868-000-5

338-31

幻影と夜曲

秋田 雨雀 / 著

M44

DBB-0033



